畫本西遊全傳

四編

四

へ遠ゾ1特
2500
40-34

帝国図書館蔵
2500
40-34

池内

繪本西遊記四編卷之四

岳亭丘山譯
孫大聖勸善苑霖
鳳仙郡員天致昌子

斯て三藏師徒い亦西ゑ向て行吏数日ゑ〜て爰ゑ一座の城地あり城中の光景或ゞ冷落〜て前面の房の簷の下に許多冠帶の人集つて居て這徒弟們ゞ摸揉を見て個々驚き抑是ハ妖精なるゝ人なるゝと大怪氣ゑ眺居〜ゝ三藏則ち進み倚て衆人ゑ對ひ貧道い東土大唐王の旨を奉じ大雷音寺ゑ至つて仏を拜し經を求るの僧なり貴方の間路を不知列公ゑ無礼を犯〜ゝ万望の罪を免恕ゆへと云々とバ一個の官人身を躬て曰く此處い天竺一の外郡鳳仙郡と号に題ゝり近来連年亢旱ゑ因て五穀不實郡侯爰ゑ榜文を

出て明僧を得て雨を祈しめんとす我れ榜札を保守
宮人ふて侍へば敢て長老を咎るふ非ず三藏是を聞て一遍
を顧の人を一張の榜札あり其文ふ曰く
大天竺國鳳仙郡郡候上宮　爲榜聘明師招求大法
事茲因連年亢旱田畝無收富室聊以倫生窮民難
以活命斗粟百金之價束薪五兩之資十歲女易米
三升五歲男隨人世帯去城中懼法曲衣當物以存身
御下數人打劫喫人而顧命爲此出給榜文仰望
十方賢哲祷雨救民願以千金奉謝決不虛言須至榜
者
三藏行者を顧て曰く你常ふ能雨を祈る今此處の爲ふ一

場の雨を要め民を救ひ國安んぜば豈万金の支ふ　ぞや行者答
て曰く雨を喚ん尼を招くの如きは那ぞ難き支ふ有ん衆宮行
者が言を聞大ふに惟喜人を馳て郡候ふ這由を報ゝ急
ぎ郡候上宮是を聞て滿心勸び急ぎ衣冠を整へ街上ふ出
来て三藏四衆を礼拜し親自宿路して四個を府中ふ導
引往正堂ふ請ぜ入衆宮大家礼畢て後郡候三藏ふ對
ひて曰く下官這郡を司どりて以来一連三載の乾荒ふ遇
草木枯盡し五穀實を大ふの人民盡く餓死ふ到んとす俸
僥ふ今神僧爰ふ来て若一場の雨を賜ひ衆民を救ひ
ゆゝ千金を以て德ふ報ひ奉らん三藏行者を指て答て曰
く我大徒弟孫悟空常ふ能雨を要む万望ふ他ふ由人ふ

悟空竜王を
央て雨をこ

行者笑て曰く若千金を以て報ゐんと有バ却て半點の雨も
得べからず但功を積德を累ねて自然と甘雨降るべし我今一場
の雨を要めて你が送り侍らんと頭て堂下に立て真言を念
動くまゝ即時東方より一朶の烏雲現ぜ漸々に落し来る
雲頭に色有て曰く東海竜王敖廣未だ今孫大聖老竜
を呼ぶ何の命令有や行者曰く別に甚き事に非ず延
鳳仙郡の地連年の旱荒に依て五穀實ず我今竜王を央
て雨を施し民を済ん為ず竜王の曰く大聖の央を止事ん
雖も我が原玉帝の命を請ざるに漫りに行雨神將を動
を能ハず大聖已に民を拯済の心あるが當下より快く天宮に
到て此上旨を准奏ひ既に玉帝の命あるが老竜即時に

水官行雨神將と呼で一道の雨を降し侍ん行者是を聞て
然で你日帰て去我玉帝に奏聞まゝと曰竜王を帰しめ
直に雲に打跨て空中に飛去り郡候衆官是を見て驚
き十分恭敬を加へ急ぎ満城に令を傳へ家々に香を焚せ天
に向ひて拜せしめ俄に素筵を安排して三藏们三個を管待
り斯て行者は雲を縱て一直に西天門に到て護国天王に
見て是を央て鳳仙郡の為に雨を要へた由を委しく告バ王
帝是を聞宜て則ち行者を殿前に宣せあひ你今雨を要
ん事を願へ三年前十二月廿五日朕出行して萬天を浮遊て
三界を監観と思へ時彼鳳仙郡の群候斎天の供物を推
倒し狗に喰せ穢言を出して罪を犯こと這故に他に

三等の罪を與へ三事を立て今披香殿の裡に有若三事
已に滿ぬ即時に雨と與へ〳〵三事未だ終ぐんで你も速に
立去べしと曰ひて頓て四大天師に命じゐひ行者を領て披
香殿に入て彼三事を見せしめ給ふ行者急ぎ四大天師に
從ひ披香殿裡に至りて殿内に一座の米山十丈計りの高
さ有亦一座の麪山二十丈の高さあり一隻の小鷄ありて彼米
の山を喙ミ亦一隻の小狗在て麪の山を吃ひ居つ亦一邉
に一座の鐵架あり架の上に一盞の燈光を點し其上に長さ
一尺四五寸粗さ指程の金の鑽を掛て燈火の上に垂る行者
何の故と云ふを知らば四大天師に是を問へ天師の曰く那
群候上天に罪を犯し〳〵る科に因て玉帝峽二の事を立て

ひ鷄米の山を喙尽し狗麪の山を餂尽し燈火金鑽を燒斷
る時始めて彼地に雨を降らしむ行者是を聞て
呆挣呆此金鑽何の時に燒斷ん此米麪何の世に吃尽
さんやと滿面憂の色を含み脇らとして殿を退んとす天師笑
て曰く大聖憂ひゆふ莫れ這度唯一念の善慈を發せば即
時に赦さべし大聖今より下界に下つて他を諫めて一念の善心を
行ぜよ即時吾れ米山麪山を推倒し金鑽も倶に燒斷て
三事滿ぬると奏聞せば雨自然に降るべし行者是を聞て大
に喜び遂に天師に別れを告て下界に下つて鳳仙郡の
城中に飛び郡候に見え大に喝して曰く你三年前十二
月二十五日斎天の供物を推倒し怠生狗に喰せるや這故に

天地を犯し衆民を苦しむ你実を以懺悔をべし郡侯是
を聞て大いに驚き拜伏して曰く三年前十二月廿五日我妻の
不賢に因て悪言を出して争い罵つて一時の怒りに堪ず実
に莫支を做る覚り不朝も今上天より罪せらるる事斯の
如し方望の老師是を救ひ給へ行者則ち玉帝三事を立ひ
し支米山の雞麪山の灯燈上の金鎖の支るを仔細説語り你
若心を改め善に向ひ念仏看経して仏天に皈依し一箇の善
念を行ひなば即時に罪を免れべし若心を改むる支能ざるば久
からずして一命を亡ぶべし群侯再拜して曰く我今より急に
其事を行ふべしとて夫より本處の衆僧道人を残らず請
て三藏を首と做て大いに道場を開き倉中の金銀を投う

ちて小民に施し城中城外の人家都て香を傳へ大小の人家都て香を
焚て念仏せしめ郡侯首め衆官に親自香を薰じ天地を拜
し一寸の真心に到る處に充満うして未だ三日を経ざるに心
ち一天烏雲を発し雷電閃き大雨淙々として降て池塘
井溝盡く緑波を現し五穀草木勃然として色を生じ
て郡中の官民百姓女童に到るまで手を拍て皆舞躍の
万歳を謳ひ観喜の色天に振ひ地を揺て郡侯惟喜の
堪て都て国中の万民を城裡に入しめ唐僧四衆を拜せしめ大
いに逆宴を排して三藏師徒を管待なすに三藏の仏を拜ち莫支
と互ひに聖烏の袖を別て立出ひ郡侯郡官に自人を以て報
祭を奏し旌幢を繞して三十餘里を送りて別をなり然して後

國王の罪ふ
まりて悟空
米山麪山
を看る

郡候の郡中の一座の寺院を建立て年霖普海寺と号け師
徒四個の肖像を造り祠堂の裡に安置し連年四時の祭祠
を供永世香火を傳へ

禪到玉華施法會

猿木土授門人

諸説唐僧の喜喜蔽々として郡候の別に馬を向前て裁
里の路を過ると亦一座の城地に到ると忽ち二個の老者に出
遇三藏急ぎ馬を下りて當方の何と云る地方ぞと問ふ
老者答て曰く此土地の天竺二国の下郡玉華刹と呼て城
中の主王の則ち天竺皇帝の宗室なり此土華王の感ぜ賢
徳の人なり僧道を尊敬し黎民を愛し玉に老禪師城裡
に入て曾て尊敬を受ぬ三藏是を聞て老者に謝し

別に徒弟を帯し城中に上前入客館に到ると二個の徒
弟を館中に住め置関文を把て王府に到ると引礼官に
見え東土より西天大雷音寺に至て經を求るの由縁を
仔細に語て関文を換んと吏を央て々引禮官此由を
聞て朝に入て斯と報ず當城の主王是を聞て喜ぶに旨
を傳へて唐僧を宣殿上に座を賜ひ礼を行ひ関文に花
字を押ひ早て然後問て曰く國師長老大唐より爰に
到る幾許の年月を經るや三藏答て曰く貧僧路
に在吏已に久し十四遍の寒暑を經る玉花王大て曰く
然らば十四年の間に途中に躭閣有り成ん三藏曰く
途中の吏一言に尽し難し十万の艱難を受終に今這上

郡に到り玉華王十分惟喜已に遠方より来りて
一個の高徒も在ざるや三藏曰く貧僧三個の小徒弟あ
り石鼓中に住め置敢て府中へ帶来らず玉華王是を
聞て急ぎ當殿官を呼唐僧の徒弟を宣長老と同
く斎を進めよと命じ給ひ當殿官急ぎ客館に到
り行者董三個を導引て殿前に飯を来る玉華王は他
们が異形なる像を見て大の驚き色を失ひ立んと為を
三藏上前出住めて曰く千歳命々怕ぢ恐る他
们貌は醜く雖も心は却て忠良なり都て山野の出生な
ぢを禮を行ふ吏を不會万望の不敬を赦し給へと是を聞
て玉王煥然と定め頓て典膳官を呼て四衆を墓狹
亭に送りて斎を賜ひて万般と管待なり元来這玉華王は三
個の王子あり皆俱に武藝を好て大王子は一條の斎眉棍を
使ひ二王子は一把の九齒釘鈀を使ひ三王子は一根の烏油黒棒
を使ひなるが今日異形なる和尚们大雷音寺に到り經を求
る由を聞て此に来て父王是を見て驚き怕ぢ恐ひ吏を聞く
他们極めて妖精の人に似て来る成べ我们他を拉く虚
實を糺し若妖精なるべ打殺さんと個々丘八器を扯提て暴狂
亭に跑来て師徒四衆を見て呼て曰く你们は人か妖精か
実を以て来歴を語べ我輩が手を動をを脱ぢと罵る
べ三藏飯碗を去て身を躬て答て曰く貧僧は唐朝より来
る者にて実に妖精に非ず大王子の曰く你則ち人に似ら

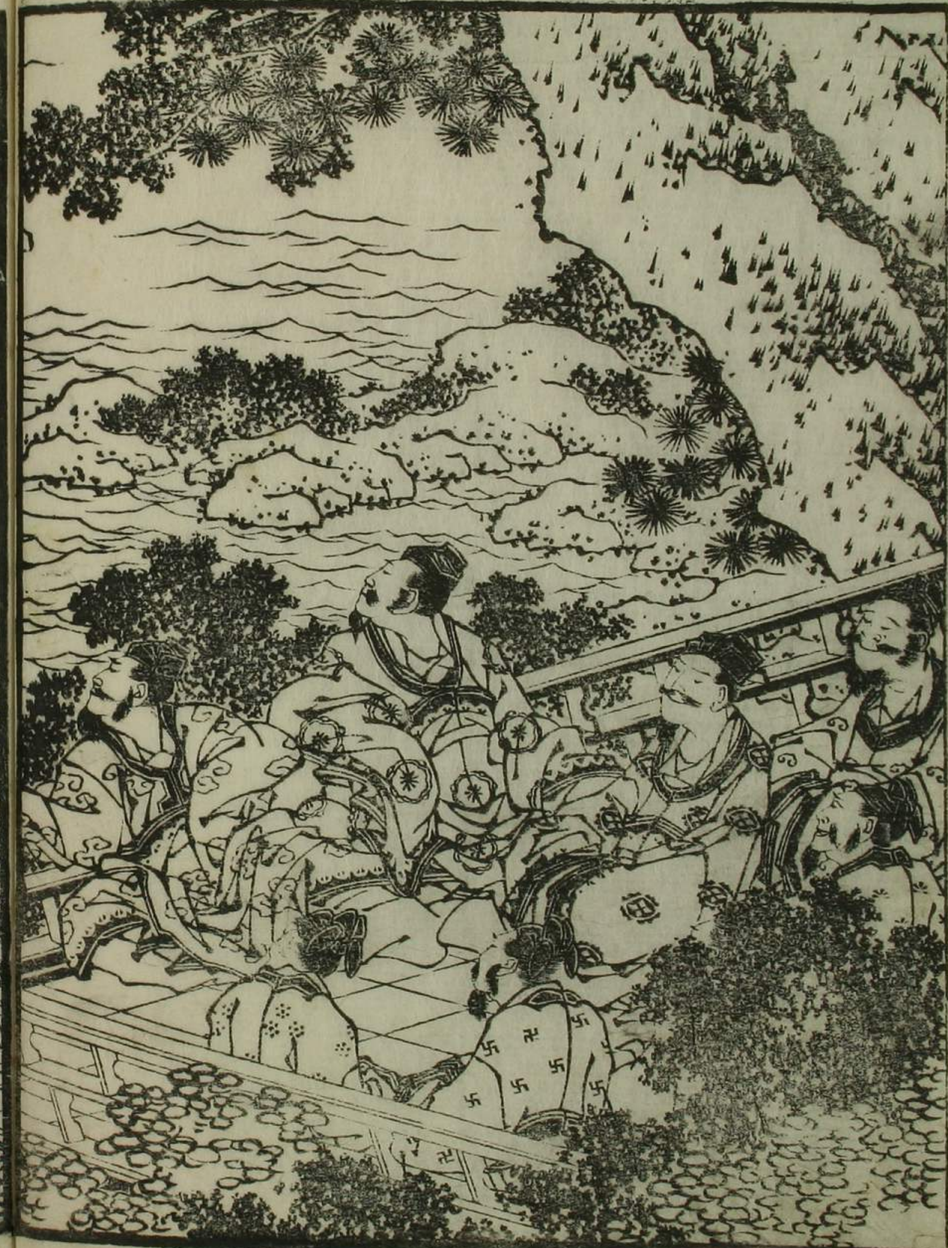
彼三個の極て妖精の疑ひあるべき行者沙僧頭を擧て曰く我
輩都て貌の妖精の似ることは雖も心の却て良善なり你三個何
人なるべき這樣の吾輩を詈るや曲膳官一邊の在て是を看て
曰く長老怪なる哉是這三位の即ち我国王の小殿下
なり八戒の口の骨髓を食して在るる此時溝々吃畢て這方を
顧て曰く小殿下個々兵器を把の吾們と手段を爭うん
と思ひの小殿下と云て二王子是を聞て則ち釘鈀を打振て勢
ひを見せの八戒嘻々と笑ひ出て偖の小殿下も釘鈀を使
ひの我も亦同き釘鈀を持て今你の見せ侍らんと腰より
小き釘鈀を取出て一振振ば忽ちの大太となる金光爛熳と
して萬道を輝て瑞氣千條の二王子大の驚きを做不

期後退へ退れり行者も亦大王子の肩膊を拿るを
見て耳の裡より金箍棒を取出て一振打搖て椀やどの粗細
一丈二三尺の長さと做地上の突立て我這一棍小殿下の離
進んと云て大王子即ち跪て倚て是を拿んと爲に分毫
も動ず変能ば大王子曰驚き曰此人の験を紅染て退れり
三王子の原来撒起莽性を看て憤怒の堪ず烏油
棒を廻て沙僧を打んとす沙僧手を以て打開き亦降妖杖
を取出せば忽ち瑞光艷々として滿城を照て霞亮紛々として
真中を輝す衆位の典膳官是を看て個々呆呆掙掙て
詞なし二個の王子輩も是を看て遂の心を飯て奇の拜して
曰く我等凡眼の神師の降臨を識ず不敬の罪を赦の

へ万望ハ一場の武藝を使ひて我輩ゆ好拜せさせゆく行者是
を聞て就ち鉄棒を拿將て這處窄挾〳〵て手を展るゆ好
しかゝる空中ゆ在て一場の武藝を見せ候へんと忽ち五色の
祥雲を縱ち吻哨と一色作ちゆ半空ゆ飛昇て金箍棒を
打振て一上一下右ゆ迴り左ゆ轉ぐ黄竜轉身の勢ひを使ひ
初い人典棒と錦上ゆ花を添るゆ如く後ゆ人の影を見ず
唯一天棒のみ働く若くゆり八戒沙僧下に在て少時望を居
〳〵うるゆ堪りて両個とも亦空中に飛昇て釘鈀を使ひ
宝杖を輪〳〵上三下四左五右六前七後八丹鳳朝陽餓虎撲
食の勢ひと倣満天中に瑞氣氤氳て金光縹緲と發
聚て諸天神兵一時ゆ武を演ると疑ゆ此時王府の土王を首

め大小の官員満城中の人民們都て遥ゆ虚空を拜し大家
奇異の思ひを做ぬ悟空們三個漸ち時有て空中より飛
下て僊ゆ師父を拜して座ゆ三個の王子等急ぎ宮裡
ゆ跪て父王の前ゆ跪下我們首め他們三個を妖精と
疑ひしゆ却て是宣の神僧ゆて我們愧ぐ紅顔今より他
們を師と做て武藝を学ん吏を要む万望ハ父王是を免〳〵ゆ
へ玉華王是を聞て曰く你們既ゆ他を師と為吏を要む
我親自往て是を迎へ来ん〳〵と遂ゆ自宮を上出鳳車ゆ
座せば微蓋を張ぢ父子四個歩行して暴沙亭ゆ来り三藏
四衆を大座ゆ正〳〵老王座を辞て曰く唐老師父ゆ孤一吏
の要あり三位の高徒是を容ぬんや三藏答拜して曰く千歳

悟空ホ三個
空間ホ五て
武藝を展ろ



の尊命小徒等何の異議ゝ在んゝ速ゝ是を命ずゝ玉華王
曰く朕肉眼凡胎ゝ向ゝ許多の不敬を做さゝ當下三
位の高徒空中ゝ在て旋展を現ゝ見て初て仙佛の
臨凡を知ぬ孤三個の太子在個々武藝を學ん事を要む方
望ゝ老師間天地の仙傳を小児們ゝ度ゝ便城の資を
以て謝ゝ奉らん行者笑て曰く我們出家人快く幾個の
徒等ゝ傳ん事を要む小殿下既ゝ這仙あゝば分毫も財利
の事を云べゝ唯真を以て学ぶ玉華王是を聞く
十分惟喜四衆を亭中ゝ款留せゝ翌日三個の王子悟空
輩三個を拜ゝ師等ゝの禮を做他等ゝ兵器を要て看ゝ原
来他輩ゝ兵器ゝ造化自然の宝貝なゝば凡體の力ゝ一
毫も動揺事能ず行者是を見て且你等に神力を授けて
後武藝を教示べゝと三個の王子を一固の静室に座せゝ
眼を瞑せ真言を念て仙氣を腸中ゝ噴入ゝば三個忽ち精
神俄ゝ百倍ゝ進退常と大ゝ昏ゝ三個の王子大ゝ惟喜
頓て立出て彼兵器を取拳見ゝ仙の尺ゝ運用自然ども堅兵
器ゝ悟空們隨身の宝貝とのひ旦行数重ゝて此三女千ゝ余る
處あゝば三固の兵器を戎揉と做個々行数を減じて造ー
むるに如ゝと俄ゝ許多の鐵匠を宜入て一王府内院ゝ一箇の蓬
殿を構へ大王子ゝ悟空ゝ鉄棒を戎揉ゝ二王子ゝ八戒ゝ釘鈀
を摸ー三王子ゝ悟浄ゝ宝杖を鑄ゝる鐵匠ゝ王子の命を受
て蓬殿の裡に悟空們ゝ鉄棒釘鈀宝杖を住置是を見て居

夜精神を竜て鋳造り却説玉華城より北七十里ゐ豹頭山と云る山あり山中ゐ虎口洞と号る處あり這虎口洞中ゐ三個の妖怪住つて這妖精一夜洞門ゐ出て見ゐ玉華城の方ゐ當り一道の金光赫然と発り天を遮る地を覆ふ妖怪是を見て怪しと雲ゐ駕て空中を飛行玉華城ゐ到つて打探看ゐ一箇の蓬殿の裡に三般の兵器あり一固ゐ鉄棒一固ゐ釘鈀一固ゐ宝杖這三般の兵器金光を縦つゐぞ有る妖精是を見て大いゐ驚き且喜び是何人の宝貝ぞを不知然れども當今我眼ゐ中つて之れ我ゐ縁有宝貝ぞとて遂ゐ三般の兵器を奪ひ取又雲ゐ打駕て豹頭山ゐ皈りぬ

黄獅精虚設釘鈀會　金木土計鬧豹頭山

却説幾個の鐵匠の輩連日の苦辛ゐ因て前後も覚ぬ熟睡し大明ゐ及で起出蓬下ゐ入て看べ彼三般の兵器を見て個々驚き慌得斯と王子ゐ報ぐべ三個の王子も亦驚き出来つて彼処麦ゐ尋ぬども亦更ゐ有更ゐ萬一師父ちの收取ゐゐ有ぎやと急ぎ人を遣て問ぜんべ悟空們三個も同く驚き諸俱ゐ出来べ父王も是を聞て急ぎ立出ゐひ都て皆蓬下ゐ集つて曰く原来凡人の能動ぐべき兵器ゐ非ず殊ゐ這内院外人の入来る處ゐ有ぐ怎麼夜中に失ひぬるやゝと區々ゐ議論して果ぐ行者女時沈吟して曰く偖ゐ這近き一邊ゐ妖怪の住處ありと覚ぬる殿下此議怎何玉華王曰く神師の問甚好ぬる原此洌城の北ゐ豹頭山と云

る山あり山中に虎口洞あり洞中に一個の神仙亦虎狼妖怪有
と云傳へくり孤是を訪ざるべし未何者なる吏を知ば行者曰く
然らば彼兵器に其妖怪ぞ倘なるに疑ひ我今去て其消
息を打探来るべしと云ると思へば忽ちに空に飛上り形
影に見ざる成ゆくり斯て行者は北に向ひて七十里余り飛行一
座の山頭に住つる四方を望居る處に忽ち山の後嶺より両
個の狼頭妖精ぞ出て話説をしつる行者是を看
て急に身を胡蝶と変じ翩々と飛行一個の妖精ぞ頭
に住つる他の方ぞ行くに従ひくるに彼妖精只管説話して曰く
昨夜大王の得たる三件の兵器は世間無類の宝貝なり明日
鉞鉤會を做ぬるとも我輩も皆ぞ受用もらん我輩今這

二十両の銀子を両三両分ち取且幾杯の酒を買きて一件の衣
服を買て我々ぞ得と做其後猪羊を買花帳を作つる故
るべしと列笑大略を上て急だる行者要子を聽得て備に洞
中の妖精ぞ倒るに極つると仙裡暗に惟喜今這両個の
妖精を打殺んと欲要ども鉄棒を倒さんと手に物なく
遂に飛下りて本相を現し妖精に向ひて一口の唾を噴て定
身の真言を念ずれば両個の妖精身を揺に吏能に手脚を
直定て苦伝り行者則ち他と扯倒し衣服を揭げ着ぬ果
的二十両の銀子あり亦腰に帶き斜児を掛ぬり一個の刀鎗
古怪一個の古怪牙鑽と二鳥ぞ着る行者遂に銀子と斜児
を奪取急ぎ西に駕て玉華州に飛飛て王府に到て王老

王亦三個の王子に見え動静を仔細語って今八戒沙僧を
同伴再度那里に到って宝貝を拿返し来るべしと所の詩妻の
猪羊を買要めらると告々たび三五日を聞て急ぎ下官
に命じて幾件の猪羊を買得め行者は迦葉々々たび行者是
を手に把て八戒沙僧と諸俱に再び雲に打乗て空中に
飛去々り斬て三個壮に向ひ豹頭山に飛行鶴に定身に做
置る両個の妖怪の處に到って八戒に這妖怪の像を看せ
則ち了鑽古怪に憂でさせ行者は古怪了鑽に憂で彼兒
を腰に着沙僧は商客に憂でさせ山の後辺に到って四る廻
に出るに亦一個の青臉紅毛の小妖手に書匣を携へ東
南に向ひて出来って行者を看て古怪了鑽飯ってらる你幾

口の猪羊を買来ってるや行者曰く猪羊合せて十五口あ
って你は那里に去や小妖曰く我行節山に行て老大王を
請て明日の釘鈀會に赴しめんに行者曰く你莫請帖を
我に看よと拉拿て書匣と開きて看に張の紙に寫著て曰く

明晨敬治餚酌慶釘鈀嘉會屈　尊車從過山一叙
右啓
年月日　外　至志

祖翁九霊元聖老大人尊前　門下孫黄獅頓首百拝

行者看畢て仍ち小妖に迦葉々々たび小妖急ぎ受把て行
節山に赴きて行者両個に謂て曰く黄獅に管ぶ金毛
の獅子に呼べ彼九霊元聞て何者ぞと語って小管大路
を行處に不多時一固の洞門を看是則ち虎口洞なり大小の

小妖们才鑽両個ゞ飯つて来るを見て門を排く行者輩三個前を入で亦一個の小妖是を見て大王に報ずるに妖王出来つて才鑽両個飯つて行くゝ你妥安の猪羊を要ゆ来つゝぞ亦那処ゆ帯来つたゝ何的るぞ行者曰く猪八戒羊七口猪の價十六両羊の銀九両ゞ向の銀子二十両を徧ち則ち五両の不足ゆり這個い是則ち猪羊を賣くる客人ゞ彼銀子を乞ん為旦大王の得ゆひ宝貝を拜看の為に来つたゝ妖王是を聞て曰く彼宝貝ハ玉華刹城中ゞ得る兵器なれば若這商客彼城中ゆ到ゞ人ゆ語らば悪ゞ敗ん你無要の吏を語つてゝる行者曰く這商客原他郷の個決て彼城裡ゆ到る吏ゞ大王旦他を計

して裏ゆ入り銀子と飯を奪へて飯〳〵ゆく妖王曰く既ゆ斯の如んを酒飯を奪へて飯らせゝと遂ゆ二個を堂中ゆ入〳〵めゞ悟空们三個堂上ゆ登りて両邊を打控見が一個の廳上ゆ彼釘鈀を置鉄棒と宝杖を両邊ゆ倚掛ゞ八戒是を見ゞ直に本相を現〳〵釘鈀を取爰ゆ及ぐ行者沙僧も本相を現〳〵彼廳上ゆ飛上て鉄棒と宝杖を推把展一斎ゆ外面ゆ討て出る妖王是を看て大ゞゆ驚き你们是甚麼的ゞ我宝貝を倘やと罵つゝ行者怒て曰く你賊毛團我輩を知ざるや我い是東土の聖僧唐三藏の徒弟輩ゞ玉華刹の三個の王子我们を師と〳〵武藝を学び我们ゞ宝貝を摸様と做他輩ゞ兵器を

悟空ら三個
黄獅精と戦ふ

造鋳〳〵めんと内院蓬殿ゑ放在くるを你夜陰ゑ偷扣部〳〵
我們を虚頭騙と云や你今我們が兵器を試看と三個
一斛ゑ打て撒ぜば妖王是を看て四明鏟と打振て跳つ出
女時支へ戦ひ〻ども那ぞ三個ゑ敵ぜんや遂ゑ力衰へ
東南ゑ向ひて風を巻て逃去る三個更ゑ追ぜ洞
中を巡廻り小的の妖精們を盡く打殺し火を放て洞を
焼拂ひ遂ゑ三個雲ゑ打乗玉華城ゑ飛飯り三件の兵
器を三個の王子ゑ通呉々ども王子の輩を上首とし衆
部の官員們大ゑ惟喜虎口洞の光景を逐件ゑ向聞
悟空們三個ゞ神通を称〳〵る然ども玉華王三個大ゑ
憂の色有て曰く彼妖精逃去て今往方を知ぜ怕く

再般来て讐を復んと行者是を聞て曰く殿下管ぜ愁ひ
ゆ〻ふ吏勿を我明旦他們を降伏〳〵偖ん玉花王是を聞
て仙安堵延宴を開そ只管ゑ管待師徒四個遂ゑ
其日ゑ菌中ゑ安歇て却説那妖王ゑ東南を指て飛
去其夜遂ゑ行節山九曲盤垣洞ゑ到て洞中ゑ跳入て
祖翁老妖ゑ見え昨宵王華剣ゑて三般の兵器を拿返
て今日赤東王唐僧の徒弟と云る輩の為ゑ大ゑ洞中
を閉ぜ今敗北て逃来る由を語て方望ゑ祖翁後兵を
請て讐を報ぜん吏と要め侍と云々ども老妖是を聞て曰
く偖ゑ你他輩ゞ吏を知ぜ錯惹て他を犯し〻る彼輩們ゑ
是原尋常の個ゑあ〻ぜ嘴長く耳大いなる的ゑ猪八戒

晦氣色験の的い沢悟浄ゑり這両個い尚苦ゝ〻莫毛
験雷公の若き和尚い名を孫悟空と呼神通廣大ゑり壹大
甚〻旦是ゆ他を報ぜんと思ひ〻你ゞ手段ゆ行べゝ〻我親自
去て他們を拿你ゞ恨を斎しあんと頓て獅獅獅獅獅獅獅獅獅獅
白澤獅伏狸獅獏象獅の輩其外諸孫を不残引領〻
個々兵器を拿提て一陣の狂風を発し彼黄獅猪と前
ゆ進め経ゆ豹頭山ゆ到つと見ゞ洞府洞門皆一理の灰燼と
壹〻大小の羣妖們盡く地上ゆ横倒て一個も息有的な
し妖王是を看て大のゆ驚き曰驚き曰驚き曰驚き曰驚き曰驚き曰驚き曰驚き曰
る悪を作や我今洞府を焼き家子們を殺を何ぞの處ゆ
身を倚んと淚を流して悲哭ゝ〻老妖是を諫勸て曰く

既ゆ爰ゆ到つて哭泣とも益なし今より経ゆ玉華城ゆ推倚
唐僧を國王も一奇ゆ拿得て你ゞ他を雪むべゝと亦一奇ゆ
引領て玉華列ゆぞ飛去ゝる斯て翌日玉華城裡の人大
家起出て看處ゆ忽ち一群の妖精沢を乗し右を降し城
頭ゆ向ひ推倚来る国王衆官を首め城裡の老若男女
の輩是を看て大のゆ驚き打戦兢てぞ居ゝる行者手
矢ひ大家怕ゝ吏ゝ是彼黄獅猪ゞ祖公羽九聖元聖
を請て昨日の他を救んとて来ゝる我輩二個馳向ひ
ゝ他們を拿得来べゝと八戒悟浄を引領て忽ち雲ゆ乗
跨て城外ゆ越て出て半空ゆ有て待受ゝる